敗戦後における皇后イメージ

河　西　秀　哉

はじめに

本稿が明らかにするのは、アジア・太平洋戦争敗戦後の皇后イメージの変遷である。なぜ、この時期の皇后イメージを検討する必要があるのか。

1990年代以降、近現代天皇制研究は大きな変化を遂げてきた[1]。それまでは天皇制を前近代的・封建的制度と捉える傾向にあったが、この時期以後はむしろ「近代」を問い直す視座の中で天皇制を考察しようとする研究動向へとシフトしていく。言い換えれば、近代天皇制を近代的装置そのものとして見、その具体的な状況・構造を個別実証的かつ動態的に検討する研究が数多くなされていったのである。その中では、従来の歴史学や政治学などにとどまらない、新たな理論・分野の成果を用いて天皇制を分析する研究も多かった。例えば、国民国家論やカルチュラル・スタディーズ、表象論などである。その結果、これまではあまり注目されてこなかった天皇のイメージに関する研究も1990年代以降、急速に進展した。

こうした新しい研究潮流の一つとして、ジェンダーによる天皇制・天皇像分析がある。ジェンダー分析は、近代天皇制を家族国家として捉える視点や、フェミニズムによる研究を批判的に継承しながら展開された。ジェンダーを用いた長志珠絵による先駆的分析は、前述の国民国家論や図像研究の方法論をも採り入れながら、「男性」として創られていく明治天皇のイメージを明らかにし、国民国家におけるジェンダー表象としての天皇の重要性、近代天皇制のあ

り方を提起している[2]。

そして、ジェンダー分析が近代天皇制・天皇像研究に用いられることによって最も進展したのが、皇后に関する研究である。近代皇后の図像を分析した若桑みどりは、明治天皇の皇后であった昭憲皇太后の図像に特に注目し、皇后が近代日本における女性の国民化の過程で重要な役割を果たしたことを明らかにした[3]。若桑によれば、皇后のイメージは、洋装をすることによって近代化を見せる側面と、道徳教育の広告塔として「婦徳」の側面を表象する、その二つの要素を併せて持つものであった。そしてこうした皇后イメージを利用することで、明治国家は女性を含めた国民統合を図ったと若桑は主張する。

これに対して、皇后の主体性とそれぞれの皇后の違い・独自性を主張して若桑に異論を唱えた片野[4]は、若桑が提起するような皇后イメージはまるで政府の「着せ替え人形」のようであり、皇后自身の主体性がないと批判する。片野によれば、皇后はそれぞれ個性を持った能動的な人物であり、決して国家に命令されて動いていただけの存在ではなかった。生き生きとした皇后の行動や思想がそこにはあった、と片野は主張するのである。また、そのような皇后の主体性を注目すれば、それぞれの皇后のイメージにも違いがあり、その行動と思想も実に多様であったと結論づける。

たしかに若桑の研究では固定的な皇后像が描かれがちであるが、片野の研究からは社会状況の変化に応じた時期ごとの皇后像の違いも明らかとなる。しかし一方で、片野は皇后の果たした役割を強調しようとするあまり、皇后の思想や行動を高く評価しがちである。そしてその結果、相対的に天皇の存在を軽視しているなどの問題も残る。天皇と皇后が近代天皇制・天皇像の中で車の両輪のように、それぞれの役割を相互補完し合ったと考えるべきではないだろうか。その上で皇后の行動や思想を評価すべきであろう。

そして本稿にとってより重要なのは、若桑・片野両者の研究は、敗戦後の皇后像についてほとんど研究対象としていないことである。片野は近代それぞれの皇后の違いを述べて重要性を指摘しつつも、その検討は大正天皇の皇后であ

る貞明皇后までで留まっており、昭和天皇の皇后である香淳（良子）皇后は対象となっていない。若桑・片野以後にも皇后についての研究はいくつかなされたが、基本的には同様の傾向を有しており、敗戦後は示唆にとどまっている[5]。つまり、ジェンダー分析によってなされた近現代天皇制・天皇像研究は、敗戦後の皇后像の解明という課題が未だなされていない現状にあると言える。

一方、敗戦後を検討対象としている象徴天皇制・天皇像研究では皇后はどのように扱われているのだろうか。表象文化・ジェンダーの観点から敗戦後の皇室写真の分析を行った北原恵の研究は、この問題に取り組んだ最初の研究と言える[6]。北原は「天皇ご一家」のイメージに注目し、近代天皇から象徴天皇へと変化する過程での天皇制のジェンダーの揺れ動きを明らかにするとともに、「ご一家」イメージによって象徴天皇イメージが補強・確立されていく過程を描き出した。その中では、本稿で明らかにする皇后の「母」としてのイメージも一部述べられている。

この北原の提起を受けて、象徴天皇制・天皇像研究においても、皇后についてより詳細な検討がなさせれるべきであったが、実際にはそうはならなかった。なぜだろうか。それは私自身の研究が代表している[7]ように、象徴天皇に関するイメージ研究は天皇や皇太子を中心に行われてきたからである。そして、天皇や皇太子のイメージを検討したその後は、皇后よりもその娘である内親王たちや皇太子妃となる正田美智子に焦点を当てることが多く、皇后それ自身の検討はほとんどなされてこなかった[8]。もちろんこれまでの研究でも、香淳皇后については全く触れていないわけではないが[9]、「新しさ」や民衆との身近さをイメージさせる美智子妃に対するカウンターパートとしての存在に皇后が例として出され、皇后自身のイメージに対する内在的な検討は行われてはいない。皇后イメージがある種の「古くささ」を持っていたという私の以前の指摘は本稿で明らかにするようにそれ自体間違っていないと考えているが、例えば1946年に制定された日本国憲法では両性の平等原則が定められるなど、女性の地位は戦前と変化を遂げている。つまり、1958年から始まるミッチー・ブー

ムに至るまでにも、その10年間余で皇后イメージが象徴天皇像確立・定着に果たした役割はあるのではないか、という疑問も出てくるだろう。このように、象徴天皇制・天皇像研究においては天皇・皇太子や他の皇族については解明が進みつつも、皇后については空白で、彼女が象徴天皇制の中でどのような意味を持ったのかは未だ不明だと言ってもよい状況なのである。

以上のように、近年の新しい二つの研究動向からも、敗戦後の皇后についてはこれまであまり研究対象とされてこなかったと言える。そこで本稿では、敗戦後の皇后イメージについて特に焦点を当てて解明し、研究の空白を埋めていくことを目的とする。とはいえ、敗戦後の皇后についてはこれまで未解明な部分が多く、皇后の行動や思想そのものについては検討対象外とせざるを得なかった。それについては今後の課題としたい。本稿では特に史料として、新聞や雑誌、そして皇室記者たちが敗戦後に積極的に出版した皇室関係本を検討しつつ、その中で描かれる皇后イメージを明らかにする方法を採る。そして、そのイメージが象徴天皇制・天皇像の確立過程においてどのような意味を持ったかについて考えていきたい。

Ⅰ 「母」としての皇后

昭和天皇の皇后である良子皇后は1903（明治36）年３月６日、久邇宮邦彦王の長女として生まれた。学習院女学部中等科在学中の1918（大正７）年１月に裕仁皇太子の妃となることが決定する。その後、いわゆる宮中某重大事件がありつつも1924年１月26日に結婚し、昭和天皇との間に５人の女子（１人は夭折）、２人の男子をもうけていた。敗戦時の1945年８月には42歳、長女の成子はすでに1943年に東久邇宮盛厚王へと嫁ぎ皇族から離れていたが、まだ５人の子どもを抱える「母」であった。そのため、敗戦後も「母」としての皇后イメージは積極的に展開されていくことになる。

敗戦前、特に戦時体制の中で、皇后の「慈母」としての像は大々的に提示されていた[10]。皇后の清貧な日常生活と社会事業への取り組みがメディアを通じ

て流され、彼女が戦争遂行のために、そして国民生活のために自身の日常生活を犠牲にしている姿が強調された。民衆も同じように自己の生活を犠牲にして戦争へと協力させる、そのための見本として、皇后を「慈母」と強調するイメージ操作が行われたのである[11]。

そして敗戦後も、そうした皇后の「母」としての側面は継続されていく。それを示す例として、まず「母の日」について見ておきたい。1931年に大日本連合婦人会が結成されたのを機に、3月6日の皇后誕生日（地久節）は「母の日」とされた。しかし敗戦後、1948年になると5月第2週に変更となる。この日程変更は、アメリカなどの母の日の日程にならったものである。その翌日の新聞を見てみよう。

> 九日は国際母の日、約三千の母たちがこの日午後二時宮中で「日本の母」皇后さまにキレイな花束をさゝげた[12]

ここでは、全国の母親たちが大挙して皇居を訪れ、皇后に花束を渡したことがわかる。そして、記事の中での皇后は「日本の母」としてイメージされている。この行事は翌年以降、東京都と母の日協議会の主催する大会が開催されるようになり、大会後に皇后が全国の母親代表から花を贈られ挨拶を受けることが慣例化していった[13]。新聞ではこの行事が図1のように写真付きで取り上げられ、「母の日」と皇后が結びつけられていく。皇后はその中で、母親の代表たちに「身体を大事にして立派な母になり、健全な子供を育ててください」との声をかけた。そこには、母親たちを統合し、「日本の母」の頂点として、また「母の象徴」[14]として存在する皇后の姿を見ることができよう。このようにして、「母」としての皇后イメージを人々に印象づけていったものと考えられる。

またこの「母の日」の行事で興味深いのは、1951年には東京郵政局が母の日中央協議会と共同で、新宿や銀座などの駅前で皇后の宛名を印刷した官製葉書5000枚を通行人に無料配布し、その場で皇后への簡単な文言・住所氏名を書いて、皇后に渡すという試みを行っていることである[15]。前述のような母親たち

街にあふれたカーネーション

赤、白のカーネーションに彩られて、きのう全国で"母の日"の行事がくりひろげられた。

皇后陛下にも花束

"母に感謝"の多彩な催し

"カトリックの母"

日米代々木聖心会

ワシントン、シアトル二日発AP＝共同＝「九五一年の米国カトリックの母」の称号は米国聖心会代表に授けられた。

照・羽黒

初日興行

十時

開場 開演 終演

第一回 九時半 十時 十時半

第二回 十時半 十一時 十一時半

第三回 十一時半 十二時 十二時半

第四回 十二時半 一時 一時半

第五回 一時半 二時 二時半

第六回 二時半 三時 三時半

第七回 三時半 四時 四時半

第八回 四時半 五時 五時半

第九回 五時半 六時 六時半

第十回 六時半 七時 七時半

【写真 花束を贈られて上機嫌の皇后陛下】

図１　『朝日新聞』1951年５月14日

が皇居に入って皇后と直接会って言葉をかけてもらうことも、天皇制が民衆に近づいたことを認識する大きな意味を持ったと考えられるが、このように民衆の言葉を皇后に直接伝える仕組みも、象徴へと天皇制が変化したことを示す大きな要因になったと推測される。

次に、皇后の「母」としてのイメージが、皇室記者などによってどのように描かれたのかについて見てみたい。『読売新聞』の皇室記者であった小野昇は、『母』という雑誌に「“大いなる母”皇后さま」という文章を寄せている[16]。この文章は、戦時中の皇后の様子を克明に描き出すことから始まる。防空壕へ入った皇后が疎開している皇太子ら子どもたちに対して「たちがたい生みの母への切々たる思慕」を懐く。この場面は、事実を伝える記事と言うよりむしろ

激しく劇的なルポタージュやドラマのような形で描かれている。戦前、天皇家は親子一緒に暮らすことができず、子どもたちは外に出されて養育されるのが慣例であった。ここで小野は、親子離ればなれになっている皇后と皇太子をクローズアップし、皇后の「母性愛」を強調することによって皇后の「人間的苦悩」を照らし出し、その「人間」性を人々に示そうとしたのである。そこには、近代天皇制を異質化し、象徴天皇制を人々に受容させようとする意図が込められていた。そして敗戦後の記述では、「民主化」という天皇の意思を受けて、子どもたちの人間的教育を積極的に取り組む皇后の姿が描かれる。小野はそうした皇后の積極性は、「母性愛の発露」からだと結論づけている。小野の文章は、一人の人間としての皇后イメージを確立・定着させるとともに、「母」としての皇后イメージも印象づけるのにも作用していったと考えられる。

『毎日新聞』の皇室記者であった藤樫準二が執筆した『陛下の“人間”宣言』[17]にも、小野と同様の記述が見られる。この本は、1946年1月1日のいわゆる「人間宣言」の中の「人間天皇」という要素を社会に広めるために執筆されたもの[18]であり、天皇や皇后の人間性を強調する側面が強い。藤樫によれば、それまでの天皇制は官僚や軍部によって神格化を「おしつけられ」ていたのだが、人間である以上それでも「親子の愛情に世の常と異るところ」はなかったと断言する。また、天皇家の親子が別に生活しているのは「如何にも親子の情愛が薄いやうに見受けられるが」、これは宮中の慣例であり、天皇皇后は仕方なくそうしているのだと擁護も試みている。こうした子どもたちとの別居生活においても、天皇皇后は教育方針を熱心に側近へ指図し、毎週日曜には「親子水入らずの団欒に過」ごすと藤樫は強調し、彼らの家庭的な姿を印象づけようとする。ここでの藤樫の意図は明らかであろう。そして、戦前には「宮中でお節句などに皇后様がみずみずしい丸髷にお結ひなつて楽しくお集ひになつた時代もあるさうだ」というエピソードも紹介し、「皇后様の丸髷姿、思つて見ただけで、国民の親愛が増すではないか」と結論づけている。このようにして藤樫は、子どもたちのために奮闘する「母」としてのイメージによって、皇后の朗らか

な人柄を伝播させようとした。ここで藤樫は、天皇家も民衆と同じような親子関係にあり、極めて人間的な振る舞い・思考を有しているということを描いたと言える。その中での皇后は、子どもたちを心配する「母」として、またユニークさによって家庭に明るさをもたらす「母」として捉えられたのである。

ところで、「人間宣言」を伝える新聞記事（図２）では、北原恵が指摘するように、女性皇族が大きな役割を果たしている。天皇と三女孝宮とのツーショット写真も普通の「人間」としての親子関係を示すのに大きな効果を持ったが、隣に写った皇后と娘たちが鶏を世話する写真は、敗戦後の食糧不足と混乱の中で「食」や「育」に従事する女としての役割が象徴化されている[19]。女性のみの写真をここで掲載することで、男性である天皇から切り離され、女性性としての皇后、家庭の「母」としての皇后の姿が浮き彫りにされる。ここでは、家庭の中で家事を行う存在としての女性、その象徴としての意味を皇后は

図２　『朝日新聞』1946年１月１日

持っていたと言えるだろう。

以上のように、敗戦後、皇后の「母」としてのイメージは、「人間」としての天皇という側面をアピールすることと併せて、積極的に展開されていくことになる。そのような「母」としての皇后は、天皇家が一般の家庭と同じであることを印象づける側面を有していた。「下々の家庭と少しもちがつたところはございません」[20]という言葉に代表されるように、「民主化」された象徴天皇像を表象する側面を有していたのである。そして、「母」としての皇后イメージの側面を描き出すことで、人間としての天皇イメージが定着する効果もあった。その意味で、敗戦後の象徴天皇像の要素を示すものとしての、皇后の「母」イメージであったと考えられる。一方でその、皇后の「母」イメージは、戦前以来の「国母」としてのイメージから引き継がれたものであったことにも留意しておきたい。戦前のその経験があったからこそ、皇后の「母」としてのイメージは敗戦後比較的早くから定着していったのではないだろうか。

Ⅱ 「妻」としての皇后

皇后は「母」とともに、「妻」としてのイメージも強調された。そこで強調される皇后像は、質素な生活を送りつつ、家庭を守って夫に寄り添い、高い教養を備えながら内助を発揮する姿である。ここでは、その具体像を検討していきたい。

藤樫準二は「家庭の中の皇后様」という文章[21]の中で、天皇皇后は仲むつまじく、「誠にうるわしい家庭」であると強調する。藤樫によれば、天皇の全国巡幸中にも次のような二人の姿が見られたと言う。

> 皇后さまは微笑をたたえながら、すべての動きに、陛下との調和をおとりになつて、お二人の温かいお姿は、愛情のとけあつた、美しい一身(ママ)同体、ご似合いの天皇ご夫妻として、土地の人びとに清い印象を、おあたえになりました

ここでは、天皇に寄り添う形での皇后のイメージが描き出され、やはり夫婦

としての天皇皇后の仲の良さが強調される。Ⅰで述べてきた「母」としての皇后イメージよりも、天皇の「妻」としてのそれがクローズアップされ、天皇を一歩後ろで支える皇后の姿が想起される構成となっている。藤樫は同じ文章の中で、皇后が文化的な女性として、広い趣味を有していることを紹介し、「現代的な女性」と評価している。藤樫によれば、皇后が趣味を持ったり学んだりするのは、「『女性の象徴』としての、婦徳をみがいて」いるからである。こうした「修養の裏には『陛下の立派な御人格にたいして、私があまりへだてがあつては……』というお気持が、〔皇后に－河西注〕おありになるのだということを伺いましたが、なんという麗しい、優しいお心根でありましよう」と藤樫は絶賛した。象徴である天皇を「妻」として支えて努力する皇后に「人間」的な姿を見、象徴天皇像に対する共感のまなざしを向けさせようとしているのではないだろうか。ここでは、夫の仕事を内から助ける役目としての「妻」を、皇后はまさに表象していた。

天皇御夫妻……和やかな二人

図3　『朝日新聞』1947年9月1日

こうした姿勢は藤樫だけではない。『朝日新聞』の皇室記者であった小池信行は「家庭の奥様としての皇后さま」という文章を執筆している[22]。この文章はタイトルからもわかるように、「妻」としての皇后像がクローズアップされている。簡素な日常生活を送っていること、天皇へ常に心遣いをしていること、広い趣味を持っていることなど、藤樫と同じような話題が提示され、「妻」としての皇后像、「民主的」な天皇一家の姿を強調し、それへの共感を呼ぶような文章となっている。小池が執筆したかどうかははっきりとしないが、図3の『朝日新聞』は天皇の帽子に気を使い、一歩下がったところで寄り添う皇后の姿を掲載するなど、まさにこうした側面を表した記事であった。

皇后の日常生活が詳細に描かれることによって、「妻」としての皇后イメージが表出されるケースもあった。小野昇は皇后について書いた文章の中で、家事や趣味に取り組む皇后の生活状況を事細かに記し、「人間皇后」としてのエピソードを数多く紹介している[23]。その中でも特に、天皇の髪の毛を皇后が手でかきあげた場面や天皇が研究のために生物採取を行っているのを後ろから見ている皇后の姿について、「妻としての皇后さまの真の姿といえましょう」と評価する[24]。ここでは、夫より一歩下がった「妻」としての皇后イメージが評価されていたと言えるだろう。また1954年1月の『週刊サンケイ』は、皇后が家庭生活をリードしていると述べて、次のような元宮内官の談話を掲載している。

> 女房天下といつても、皇后さまが天皇さまを、お尻に敷いているわけではない。天皇さまは、周知のように、生物学に深い造詣をお持ちで、現在でも、国務の余暇は、ほとんど研究に費やされておられるほどだ。従つて、日常生活については、ほとんど無頓着な方で、皇后さままかせである。それで、結果的には、皇后さまが天皇さまをリードしているかたちになるわけだ。だから、“女房天下”といつても、気の強い細君が気の弱い夫の息づらをとつてひきまわすといつたようなものではなく、大学教授や科学者などの学究の家庭によくみられる、微笑ましい“女房天下”と云えるでし

ようね[25]

『週刊サンケイ』はこの話などを元に、「婦唱夫随の天皇御一家」と結論づけている。皇室記者や記事の語る皇后の状況はかなり似通っており、定型化している。おそらく、こうした記事の情報源として宮中関係者たちがおり、彼らとの協同によってこうした文章や記事が形成されていたからこそ、記事が定型化されたのだと推測される。皇室記者は日常的な天皇皇后の生活を強調することで、二人の「人間」としての側面を描き出そうとする意図を込めて記事を執筆した。一方で、こうした強調がなされればなされるほど、皇后は天皇に寄り添う存在、天皇を後ろから助ける存在という、「妻」としてのイメージが固定化していった。『週刊サンケイ』の記事は、わざわざ皇后のリードは家庭に限定されるもので、国事や公的な事項に関しては天皇は口を出さないことが明記されている。多くの記事は、皇后を決して主体的な存在として描かず、日常生活の中で天皇を支える存在としてのイメージを生産していったのである。

『週刊サンケイ』のように匿名の宮中関係者ではなく、実名によって皇后の身近にいる立場から、その日常生活を伝えようとする文章・記事もあった。鈴木一侍従次長は、皇后は「天皇のお徳に対して、立派な内助をさゝげたいとのお考えから、ご自身でいろいろ勉強なさつていらつしやるのでございます」と記しながら、皇后の日常生活を綴った文章を発表している[26]。皇后に仕えていた保科武子女官長も、皇后の日常生活についてのインタビューに答えている[27]。その中で保科は、第一に皇后の生活は「少しもみな様方と変つた御生活をしておられるわけではございません」と述べ、その生活が質素であることを強調している。第二に毎日の皇后が天皇を見送る姿は、「民間の人達が主人の出勤を見送るのと同じでございます」と、天皇夫妻と一般の家庭とは差異のないことも主張する。鈴木・保科ともに、先述した皇室記者たちの文章・記事と基本的には同じエピソードが多く、やはり情報源としてこうした宮中関係者たちがおり、彼らとの協同によって、一連の文章や記事が執筆・発表されていったと推測できるだろう。こうした文章では、皇后は「妻」として天皇に付き従い、内

助の功を発揮する女性として描かれていた。

一方で、皇后の「妻」のイメージには、「母」のイメージとは異なる意味合いも込められていた。次の文章がその典型である。

> 皇后さまを、昔は国母陛下といつたことがある。いまでも無意識にいう人があるかも知れない。日本の国を一つの家族国家とみて、女の家族の最上位にある母になぞらえた表現だった。家族制度が廃された今日では、母というのは当らない。天皇に配する、天皇と同様なる妻として見直すべきである[28]

ここには、日本国憲法施行後には戦前のような戸主を中心とする家族制度が廃止され、男女が合い並ぶ形での「夫婦」という形態が浮上してきた状況を前提にしている。そのために、「妻」としての皇后イメージが強調されるようになった。それは天皇に付き従う形ではあったものの、戦前の家族制度とは異なる新しい時代の「夫婦」のあり方を想起させるイメージではあったと言えるだろう。

Ⅲ　皇后への批判

皇后に対しては「ふくよかで健康的」といった体型に関する話題や、「美しいご微笑」といった顔の特徴もたびたび挙げられ、その親しみやすさが強調されていた[29]。その中では皇后の太った見た目も肯定的に捉えられ、それすらも「人間」的なエピソードとして消費されていたのである。

一方で、皇后の見た目に対する批判も存在した。戦時中の1944年に生地を節約するために皇后が考案した「宮中服（皇后服）」を、敗戦後も継続して着用していたからである。それはもんぺを改良した和洋折衷型の服装で、見た目のいびつさから評判が悪かった[30]。皇后は敗戦後の窮乏した民衆の生活状況を考慮に入れて服の新調を避けていたようであるが、講和独立が近づくにつれ、皇后のスタイルは「新生日本」の表象として外国使節に対応するには相応しくないとの批判が噴出する。こうした批判に応える形で洋装の新調が検討され

図4　宮中服の皇后（『天皇』天皇アルバム刊行会、1952年）より

た[31]。それを伝える記事には、「パリ・モードをとり入れたスマートな新宮中服」とある。この記事は「皇室が流行の尖端をゆかれるような印象を与え、一般女性にも相当な反響をまねいた」ようである[32]。しかし費用の面から洋服の実現には至らず、皇后は1952年から公式の場では和服を着用し[33]、四女の順宮の結婚式でその姿を強く印象づけることになる。和服姿の皇后は、日本の「伝統」性を表象する存在であった。パリモードのような「尖端」ではなく、「伝統」的で多くの女性たちが着ていた和服を公的に着ることによって、民衆に身近な印象を与えたものと思われる。

ただし和服姿の皇后は、敗戦後の新しい女性像を表象するまでには至らなかったのではないだろうか。明治文化研究家の木村毅は「皇后さまの服」とい

う短いエッセイを書いている[34]が、その中で「人間性の解放は、いま宮中において最も急速だろう」と述べた。これはどのような意味だろうか。木村の文章は以下のように続く。戦前の皇后の服はダブダブの不格好であった（「玉体」として皇后の体に手を触れることができず、採寸できなかったためと木村は言う）が、最近の皇后の服は有りふれたものになった。これは、天皇皇后が「人間」となったために起きた変化であった。しかし木村は、「今の皇后さまは、内輪で和服を着て、稀に丸髷を結っておられることもあるという話を聞いた。これは一種のなごやかさを感じさせる」と述べつつも、「おそらく当節、民間では丸髷を結う女は、芸者上りの二号夫人など以外には、少くとも東京ではないだろう。それだけ宮中には、民主化のシーズンの近づく歩度がおそいのである」と皮肉を交えて論じている。このように和服姿の皇后は、一方では新しい時代にそぐわない存在として、つまり未だ古い戦前の体制の名残りとして見られていたのである。

それゆえ、皇后の服のデザイナーである田中千代は「もっとおしゃれを」[35]と求めた。それは、皇后の和服姿が必ずしも天皇制が戦前とは変わったこと、言い換えれば象徴天皇像の新しさという側面において、それとは適合的でないと認識されていたがゆえに提起された主張と言えるだろう。そうした女性としての新しさの側面は、皇后ではなく、皇太子妃となる正田美智子の存在を待たなければならなかったのである。

おわりに

敗戦後、皇后には２つのイメージが存在した。第一に、「母」としてのイメージである。これは、敗戦前からの「国母」のイメージの継続・残存であったと言える。日本という国家の女性の象徴として、皇后は捉えられていた。しかし敗戦後の「母」としてのイメージは、「人間」としての側面をアピールすることに重点が置かれていた。「人間宣言」後の象徴天皇像を形成する一つの要素として、人々の理想的な家庭像の中での、理想的な「母」という役割が皇后に

与えられた。天皇家が一般の家庭と同じような雰囲気を持っていることを示すことで、「人間」としての象徴天皇像の基盤となっていったのである。

第二に、「妻」としてのイメージである。これは「母」としてのイメージと同様に、「人間」としての側面を描き出す意味を持っていた。ただし「母」としてのイメージと異なるのは、戦前のような家族制度が廃止された後の、新たな夫婦関係を示すものとして捉えられていたことである。その意味では、敗戦後の新しい時代状況により適合したイメージであったと言える。しかしそこでの皇后像は、あくまで天皇に寄り添う形で、一人の主体として描かれてはいなかったことにも留意しておく必要があるだろう。

皇后の外見やイメージは敗戦直後から一定程度の時期、好意的に受容されていた。しかし次第に講和独立や経済状態が好転化してくる中で、そのイメージ自体が古くささを感じさせるようになっていく。皇后イメージは敗戦直後の「人間」的な象徴天皇像を人々に定着させることの大きな要因になったが、「文化平和国家」の表象としての存在として象徴天皇が据えられていく過程の中で、日本という国家が新しくなったこと＝「新生日本」を示したいという人々のナショナルな意識を満たすことができなくなる。それは、皇太子や皇太子妃の存在を待たねばならなかった。

注

1　こうした研究動向については、河西秀哉「近現代天皇制・天皇像研究の現状と課題」（『新しい歴史学のために』262号、2007年）、同「近現代天皇研究の現在」（『歴史評論』752号、2012年）を参照のこと。

2　長志珠絵「天子のジェンダー」（西川祐子他編『共同研究　男性論』人文書院、1999年）。

3　若桑みどり『皇后の肖像』（筑摩書房、2001年）、同「『皇后の肖像』論争 昭憲皇太后は国策の『協力者』」（『論座』第83号、2002年）。

4　片野真佐子『皇后の近代』（講談社選書メチエ、2003年）、同「近代皇后像の形成」（富坂キリスト教センター編『近代天皇制の形成とキリスト教』新教出版社、1996年）、

同「近代皇后像の形成　貞明皇后の場合」(富坂キリスト教センター編『大正デモクラシー・天皇・キリスト教』新教出版社、2001年)、同「近代皇后論」(網野善彦他編『天皇と王権を考える7　ジェンダーと差別』岩波書店、2002年)、同「昭憲皇太后は着せ替え人形か」(『論座』第82号、2002年)。

5　小田部雄次『昭憲皇太后・貞明皇后』(ミネルヴァ書房、2010年)は伝記スタイルで2人の皇后を詳細に描いた研究であるが、やはり敗戦後まではほとんど検討対象とされていない。敗戦後の皇后である香淳皇后については、一般書の形で工藤美代子『香淳皇后』(中央公論新社、2000年)と保阪正康『皇后四代』(中公新書ラクレ、2002年)が出されたが、一次史料の詳細な分析など、検討の必要性が残されている。

6　北原恵「正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」(『現代思想』第29巻第6号、2001年)。

7　河西秀哉『「象徴天皇」の戦後史』(講談社選書メチエ、2010年)。

8　同じ傾向は、石田あゆう『ミッチー・ブーム』(文春新書、2006年)も有する。

9　河西秀哉「象徴天皇制・天皇像の定着」(『同時代史研究』第1号、2008年)。

10　片野前掲『皇后の近代』186～202ページ、加納実紀代「母性天皇制とファシズム」(網野他前掲編『天皇と王権を考える7　ジェンダーと差別』293～301ページ)。

11　河西秀哉「天皇制と現代化」(『日本史研究』582号、2011年、130～133ページ)。

12　『朝日新聞』1948年5月10日。

13　『朝日新聞』1950年5月10日、『毎日新聞』1951年5月14日など。

14　『読売新聞』1950年5月10日。

15　『朝日新聞』1951年5月12日、1951年5月14日。

16　小野昇「大いなる母“皇后さま”」(『母』第1巻第6号、1949年、国立国会図書館憲政資料室蔵「プランゲ文庫雑誌」所収)。

17　藤樫準二『陛下の”人間”宣言』(同和書房、1946年、以下、60～65ページを引用)。

18　高橋紘「人間天皇演出者の系譜」(『法学セミナー増刊　天皇制の現在』日本評論社、1986年、145ページ)、河西前掲『「象徴天皇」の戦後史』72ページ。

19　北原前掲「正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」242～243ページ。皇后が鶏を育てたり、菜園で野菜を作ったりする姿はその後もたびたび報道されている(例えば『読売新聞』1947年3月28日など)。その中では、敗戦後生活状況が窮乏している民衆と同じように、天皇皇后も清貧な家庭生活を送っている姿が描かれる。そして、皇后は収入が減少した天皇家の家計を助けるため、前述のような家庭菜園に取り組んでいると報道されている。このように、一家の「母」として家計をやりくりする姿が強調されることで、民衆との近さが印象づけられる記事が多い。

20　『サンデー毎日』1948年2月29日号、4ページ。

21　藤樫準二「家庭の中の皇后様」(『博愛』第710号、1948年)。
22　小池信行「家庭の奥様としての皇后さま」(『主婦と生活』第3巻3号、1948年)。
23　小野昇『人間天皇』(一洋社、1947年、93～104ページ)。
24　小野昇「妻として母としての皇后さま」(『婦人世界』第3巻第3号、1949年、24ページ)。
25　『週刊サンケイ』1954年新年特別号、8ページ。
26　鈴木一「主婦としての皇后さまの御日常」(『婦人の光』第2巻第2号、1948年)。
27　「皇后さまの御日常－保科女官長に訊く－」(『サンデー毎日』1948年2月29日号)。
28　「街の人物評論　皇后」(『中央公論』1951年1月号、86ページ)。
29　小野前掲「妻として母としての皇后さま」22～24ページなど。
30　例えば、前掲「街の人物評論　皇后」、『週刊朝日』1952年5月25日号ほか。この宮中服は「戦争最中に便利、経済、外観に重点をおき、一反の古い着物をそのまま更生し得る考案に基ずいたもの」であった(藤樫準二「皇后さまの御装い」『装苑』第7巻1号、1952年、53ページ)。
31　『朝日新聞』1951年4月11日、『読売新聞』1951年7月28日など。
32　藤樫前掲「皇后さまの御装い」52ページ。
33　『朝日新聞』1952年4月28日。
34　木村毅『ふぐ提灯(随筆集)』(文章倶楽部社、1952年、84～86ページ)。
35　『週刊朝日』1955年新春特大号、24ページ。

Summary

The Image of the Empress after Japan's Defeat in the Asia-Pacific War

KAWANISHI Hideya

This paper will shed light on changes in the image of the Empress in Japan after the country's defeat in the Asia-Pacific War.

Research conducted on the monarchy in Japan has focused primarily on the image of the Empress and its role before Japan's defeat. Research has also examined the image of the Emperor and Crown Prince, but there has not been much research conducted on the Empress and her image. However, after Japan's defeat, the monarchy gained support by strengthening its relationship with the public, and the image of the Empress in the minds of the public is considered to have had an influence.

There are two essential aspects of the image of the Empress projected to the people. The first is the image of the Empress as a "mother." The media rampantly portrayed the Empress in her role as mother to the Crown Prince and the princesses, and in doing so, established the image of the Empress as "mother" to the people as well. The second aspect is the image of the Empress as a "wife." The image of the Empress supporting her husband, the Emperor, was conveyed to the public by the media. The media also ran a great number of stories that portrayed the Emperor and Empress as down-to-earth and human. Broadly speaking, after Japan's defeat, the image of the Empress as a domestic role model was established. As a result, the imperial family, which was earlier portrayed as being focused around the Emperor alone, was portrayed as the ideal family to the people and thus gained popular support. Despite these changes, the image of the role of "Empress" was old-fashioned, and a substantive change in the image of the Emperor had to wait until the arrival of Crown Princess Michiko.